

## A-190 小児肺癌の一剖検例

症例：11才，女

臨床経過：昭和60年2月，咳嗽，発熱があり加療にて下熱した。その後，再び発熱があり血痰，右背部痛がみられる様になった。4月8日急性肺炎として治療されたが，症状は改善せず，気管支 fiberscope と擦過細胞診が施行された。気管支 fiberscope では右上葉支口より1～1.5 cm 末梢に縦隔側及び前外側より隆起する腫瘍がみられ，細胞診ではClass Vであった。

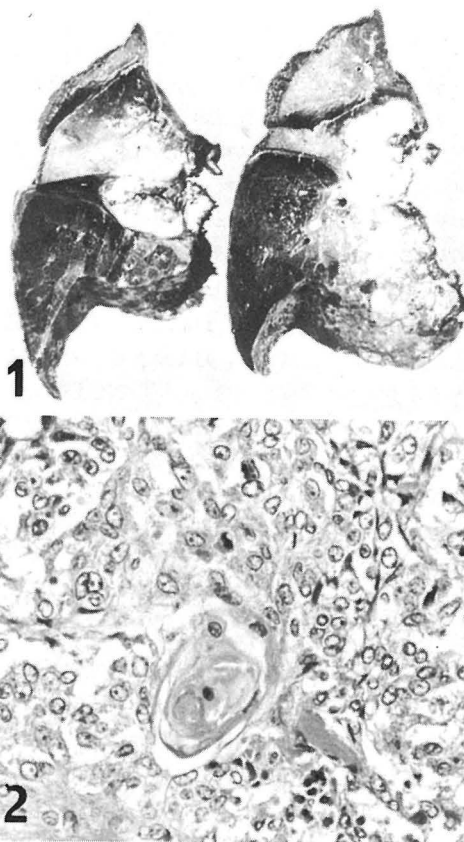
4月23日鳥大小児科へ入院した。全身CTでTh<sub>3</sub>の椎体の破壊とこれに連続する軟部腫瘍がみられ，気管，気管周囲へとつらなっていた。超音波では右胸腔内下2/3と肺内に広範な腫瘍がみられたが，前縦隔には腫瘍は認めなかった。検査所見では尿中VMA，アドレナリンは正常で血中LDH，NSEが高値であった。

4月26日（死亡7.5ヶ月前）右肺切除を行なった。右肺中葉及び下葉に腫瘍を認め（写真1）後縦隔，心のう，横隔膜へ浸潤していた。<sup>60</sup>Co照射，VCR，CPM，ADRを投与したが，骨，肝，リンパ節に転移し死亡した。

剖検所見：右胸壁，右心房，横隔膜，食道へ浸潤し，左肺，肝，副腎，左卵巣，大腿骨と腹腔内及び気管周囲リンパ節に転移していたが前縦隔には腫瘍は認めなかった。

組織学的所見：腫瘍細胞はクロマチン粗で核小体明瞭な類円形の核と立方状の胞体を有し，nestを形成して増殖し，渦巻き状の角化巣を認めた（写真2）。右肺門部の気管支上皮には異型性の強い扁平上皮化生があり，上皮直下或は上皮内に腫瘍細胞の浸潤を認めた。PAP法によりEMA染色では角化部及び多数の腫瘍細胞に陽性であったが，ケラチン，CEAは角化部とその周辺の少数の細胞に陽性であった。舌扁平上皮癌，悪性胸腺腫のEMA染色と比較すると本例は舌扁平上皮癌の染色結果と類似していた。又，Leu7は陰性で，NSEは弱陽性であった。前縦隔には石灰化したハッサル小体を伴う萎縮した胸腺を認めた。

考察：手術時の標本でハッサル小体類似の角化を伴う腫瘍細胞の増殖を認め胸腺癌を疑った。しかし，腫瘍は右肺門部を中心に存在し，剖検時にも腫瘍は右胸腔を占め，後縦隔，心嚢に浸潤し，前縦隔には萎縮した胸腺が存在していた。腫瘍細胞のLeu7は陰性，



写真説明

- 1) 手術時右肺：肺門部より中葉及び下葉に腫瘍を認める。
- 2) 剖検時，肺門部腫瘍；腫瘍細胞は類円形で渦巻き状の角化を認める。×200

EMAでは扁平上皮癌の染色性に類似しており，右肺原発扁平上皮癌と診断した。小児肺癌は稀であるが，新津等は1974年迄に16才以下の小児肺癌の報告が39例みられたと記載している。

文献：1) Niitu Y. et al.: Am J Dis Child **127**: 108-111, 1974. 2) Salle A. J. L. et al.: J Ped Surg **12**: 519-521, 1977.

安達博信，湯本東吉

（鳥取大一病理）